再登校支援における家庭訪問モデルの開発

○中村恵子¹⁾・大川一郎²⁾・小玉正博³⁾・藤生英行⁴⁾・石隈利紀⁵⁾¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾筑波大学 ³⁾埼玉学園大学

キーワード：不登校 家庭訪問 スクールソーシャルワーク

Development of the Home-visiting Support System for School Refusals

Keiko NAKAMURA, Ichiro OKAWA, Toshinori Ishikuma, Hideyuki Fujii, Masahiro Kodama

¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾University of Tsukuba ³⁾University of Saitama Gakuen

Key Words: school refusal, home-visiting support, school social work

目 的

本研究の目的は、長期不登校児童生徒の再登校支援として有効な家庭訪問支援のプロセスモデルを作成することである。

不登校とは、登校行動が家庭で停滞している状態であるため、その支援には家庭訪問が重要な役割を担う。しかし、家庭訪問に焦点をあてた研究はみあたらず、アメリカやヨーロッパの教育制度では、ホームスクーリングが選択できるため、家庭訪問は訪問教育として位置づけられ、必ずしも再登校支援の技法としてとらえられていない。ホームスクーリングが認められていない日本の学校現場において再登校支援を行うためには、家庭訪問についての支援モデル開発が必要である。

方 法

調査協力者：関東圏行政区の福祉事務所に所属し、子どもの自立促進を目的に家庭訪問を主業務とする子ども支援員4名である。

調査時期：2015年4月

分析方法：下記質問での半構造化面接を行い、インタビューを逐語記録に起こしてデータ化し、M-GTAを用いて分析後、メンバーチェックを経てプロセスモデルを生成した。

質問項目：①これまで行った家庭訪問について、不登校生徒が再登校にいたるまでにどのようなはたらきかけや支援を行ったのか、具体的にお教えてください。

②家庭訪問にあたり、事前準備や役割分担および校内調整などを行っていたら、その内容もお教えてください。

倫理的配慮：所属長と本人に研究協力および発表許可を求め、

同意を得てインタビューを録音した。モデル化過程では、意図が反映されていることを確認し、意見にしたがい修正した。

結 果

データは、65概念、28カテゴリー、6カテゴリーグループに集約され、Fig.1のプロセスモデルが生成された。

訪問支援は、「Ⅰ子ども支援員の資源化」を経て「Ⅱ家庭訪問での関係形成」の「関係形成」を土台に「Ⅲ子どもの資源化」と「Ⅳ保護者の資源化」が行われ、「Ⅴ関係機関との連携と資源化」を並行しながら「Ⅵ学校との連携と資源化」を進めるものであった。

考 察

(1) 家庭訪問では、子ども自身への介入と同時に、その変容を促すための環境調整として保護者、教師を対象に介入が行われている。問題に応じて医療機関、子ども支援課など他職種との連携をはかり、多面的なはたらきかけが展開される。

(2) 事前準備として、①支援員自身が明確に役割認知し、学校や関係支援課との連携体制を整えること、②情報収集による暫定的アセスメントと支援方針作成、③共通の話題づくりのための努力など支援の土台づくりが求められる。

(3) 家庭訪問では、子どもとの共通世界をつくって信頼関係を構築し、将来を展望しながら子ども自身に登校の意味を再考させる。子どもの育成環境をつかさどる保護者と教師が子どもの状態と予測される問題について情報提供し、支援方針を共有すると支援の役割分担が叶う。

(4) 家庭訪問に対し、本人や保護者が好意的に応じてくれるとは限らないので、粘り強い関係形成努力が必要である。

Fig. 1 家庭訪問支援モデル

注) Ⅰ～Ⅵ:カテゴリーグループ、枠内:カテゴリー、→:影響